
目目目目目

y o s h i n a

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

目目目目目

【コード】

N4996C

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

大学一年生の宗太が手にしたソレが襲う不気味さと、その不気味さに耐えられなくなった彼の顛末とは。世にも奇妙な物語系統。夏ホラー出品。

ぞろり

また、動いた。

直接見たわけではないが確かに今視線を感じた。
自分の背中をねっとり見つめているそれを。

「何なんだよ、お前……」

宗太は後ろを振り返り自分の財布を見下ろす。

あの中には、一度しか出したことの無い一万円札が入っている。
なぜ一度しか出したこと無いのか？

それは、福沢諭吉の目が動いたからであった。

*

事の発端は数日前に遡る。

大学一年生の宗太が一人暮らしを始めて暫く経った日。

部屋の小さな仏壇に供えてあったコンビニのバイトの初任給を下
ろした。

去年死んだ母の仏壇だ。

数万円入った封筒を仏壇から下ろし、一枚だけ財布に入れようと
した。

目目目目目

その時であった。
手にした万札の諭吉と目が合ったのは。

最初は偶然自分から目を合わせたのだらうと思っていたが、どうも違う。

まさかまさか。

汗が背中手足顔全てからどっと吹き出した。

頭のどこかで警鐘が鳴っていたが、恐る恐る自分の視線を動かしてみる。

右へ左へゆつくりと。

すると、

ぞろり

やはり諭吉の目も動いた。

*

目が動くのを事実として認識した時の、恐怖と驚きは声にならないもので。

本当に恐ろしい時人間は声が出ないというが、まさしくそうだと
いうことを宗太は実感した。

思わず手元にあった財布に仕舞いこんで以来、その一万円札は出
してない。

だが、仕舞うだけでは解決しなかった。

目目目目目

財布の中で目が動くのを感じるのだ。

学校へ行く時、朝起きる時、……そして風呂から上がった今も。宗太が動くたびに、それを追うかのように目が動いているのが感覚でわかる。

一挙一動見逃さないようにどこまででも目が追ってくる。きつと財布の中の諭吉はどこにでも見る万札の諭吉の顔なのだ。和服を着て、口をきゅっと引き締め、知性を伺わせる表情。ただ、目だけが動いている。無表情で財布の革越しにこちらを見つめている。

「何なんだよ、お前……」

震える唇で呟いた。

風呂上りのせいではない、喉の渴きが彼を襲う。

誰かに相談すれば良かったのかも知れないが、それも出来ない。なぜなら他の人間には動いているのが見えないからだ。

実は昨日、学校でご飯を食べている時にさりげなく隣の友人にその万札を取り出させようとした。

直接言ったほうが簡単だろうが、信じてもらえるかどうかもわからない。

それにもし自分にしか動くのが見えないのなら、入りたての大学で変な噂を立てられかねない。

それだけは何としても避けたかった。

なので、一計を案じてこう言った。

「トイレへ行って来るから財布を預かってくれないか。ついでに前借りた千円を抜いてもらっておいていいから」

心臓がどくどくしているのを気づかれないよう、平然を装いトイレへ逃げた。

千円とは言ったものの、本当は入ってない。

あの万札だけが入ってる。

それを取り出して友人は首をかしげるだろう。

一万円札しかないじゃないかと。

そして、諭吉を見るはずだ。

その時友人の目に写るのは凡か怪か。

数分して、恐る恐る戻ると友人はぱいと財布を投げて寄越した。

「おい、ちゃんと見たけど万札しか無かったじゃねーか。万札を千円札と間違えるなんて贅沢だなお前」

万札でいいなら貰うけど？ と、けらけら笑う友人を見て宗太は気が遠くなるのを感じた。

ああ、やっぱりそうなんだ。目が動くのは俺しか見えないんだ。

その場は何となくやり過ごしたが、心はそこには無く、財布から刺されるような視線に鳥肌が立った。

捨てようと思えばやはり目が合うかもしれないし、かと言ってずっと財布に入れておけば、それはそれでじっと見られてる気がする。なのであの時咄嗟に財布に入れてしまったのか。封筒のほうに入れておけばそのまま捨てられたのに。

自分しか見えないんだと知った先日の出来事を思い出し、後悔に苛まれながら宗太は、見下ろしていた財布から目を逸らしてパジャマを着ようとした。

また、それに合わせて目も動く。

パジャマを手に取り、腕を袖に通し、ボタンをかける。

一つ、二つ、三つ、四つ……

かけていく手に沿って視線もじとじと下りる。

汗でボタンが中々かけれない。

背筋を貫くそれに耐え切れず、彼は再び振り返った。

「何なんだよお前はあああああつ！！??？」

もう一度叫んで、財布を掴み取って思い切り壁に叩きつけた。

*

次の日、彼は遂に自主休講した。

無理して動こうとすればするほどあの目も動くのだ。

それならいっそじっとしてたほうがまだと思った。

寝もしないのにベッドの上で毛布に包まり、ただただじっと視線を感じ続けた。

叩きつけて落ちた部屋の隅から、諭吉は財布を通して彼を見つめる。

自主休講から三日ほど過ぎた頃。

部屋の呼び鈴が鳴った。

学校やバイト先には友人を通じて実家の不幸で帰ったと伝えてある。

一体誰だと思ったが、三日も飲まず食わずだともう動けない。

頬は扱け、髭は伸びたい放題で目は虚ろ。

隈がくつきりと出来て髪がボサボサに乱れている宗太は、そのまま無視することに決める。

四、五回呼び鈴は鳴り続けたが、その内止んだ。

毛布から顔だけをのっそりと出す。

扉の向こうはしんとしていた。

「……まあ、いいか」

思考力が削ぎ取られた頭ではあまり考えることが出来ず、もう一度毛布にもぐりこんだ。

だが、今度は数十分ほどしてガチャガチャと鍵穴が動く音がした。乱暴な動かし方ではない。

しかし、確実に鍵が開く音だ。

目目目目目

誰だ！？

ついさっきは動けなかったはずなのに、想定外の音が彼をベッドから起き上がらせた。

いきなり起きたので、ふらついてそのまま床に転げ落ちた。また諭吉の目が動いたが、今はそれどころではない。

すぐに鍵が開いた音がする。

チェーンロックを忘れていたため、扉がゆっくりと開く。そしてそこにいたのは……

「お前……なんてカッコしてんだよ」

合鍵を持ったマンションの管理人の側で、右隣に住む相沢が愕然としていた。

*

「成程な。目が動く諭吉か。それでこんなことになってたんだな」

それまでずっと毎日取り続けてきた新聞が、三日前からぱったり取られなくなり、朝刊夕刊合わせて六部が生け花のようにポストに刺さってあったのを不審に思っ、相沢は訪ねてきたらしい。

初めての一人暮らしで何かあったとも思ったのだろうか。

お隣とはいえ、そこでわざわざ訪ねてきてくれた相沢に人の良さを感じた宗太はついに動く諭吉の目のことを話した。

ちなみに相沢は宗太より一つ上の二回生だが、宗太が一浪してるため同い年である。

「で、その万札は財布の中か？見せてもらいたいけど」

「ああ……怖くて俺は開けられない」

「じゃあちよつと目つぶっておけ。俺が出してみるから」

言われるまま一分ほど目を閉じた。

財布の革が擦れる音がした後、かさりという紙のめくるような音もした。

「よし、開けていいぞ」

「……お札は？」

「見た後その辺にあった空封筒に入れてやった。とりあえずこれで財布は使えるな」

その言葉に、体の全てから空気の抜けるような感覚を覚えた。

実際人間の中に空気はないが、まるで風船がしぼむかの如き脱力感だった。

事実、腰が抜けた。

それでもやっぱり封筒からの視線を感じはしたが。

「ありがとう。やっぱり相沢さんも見えなかったか？」

「ああ。裏返してみたりぴらぴらさせてみたりしたけど、ただの普通の諭吉だったぜ。……でも、なんでお前だけそんなのが見えるんだろうな。このお札になんかしたのか？」

「別に、茶を零したり破りかけたり、そういう悪いことはしてないつもりだけど」

「じゃあどこから手に入った？」

「バイトの給料を銀行から下ろした。あ」

宗太が思い出したように口を開けた。

「何か気付いたか？」

「あ、ああ。下ろしてから、去年死んだおふくろの仏壇に給料の3万円を供えたんだ。

俺も自分で稼げるようになったよって言うために……」

そして一日経ってから給料を取り出そうとしたら、諭吉の目が動いたのだ。

新たな情報に、相沢がふむと顎に手をやり考え込むポーズをする。

「なーんか関係ありそうだなそれ。よし、じゃあそれを持っていくか」

「どこに?」

「俺の兄貴のところ。今刑事やってんだよ。聞いたところ、曰くつきのみみだしいし調べてみたら何かわかるかもしれないぞ」

*

次の日、やっと食べられるようになったとはいえ、流石にすぐには動けない宗太に代って、相沢が兄のいる警察署へ一万円札を届けにくれた。

受け取った相沢の兄はちょうど時間が出来たらしく、早めに調べると約束し、終わったなら連絡すると言った。

その言葉通り、数週間後弟のほうから宗太のほうに「兄貴が俺らを呼んでいる」と呼び出しがかかった。

署へ二人で行くと会議室と思われる、長机が並べられた部屋へ通されて、相沢兄を待つ。

数分して彼はやって来た。

「待たせたな」

「どうもすみません、こんなことに刑事さんの手を煩わせてしまつて……」

相沢弟と雰囲気の似た刑事を前にして、すっかり体は回復していた宗太は礼をする。

まだ顔に覇気が無かったが。

「いいよ。そんな気疲れした顔で人に気を使うなって。 で、面白ことがわかったぞ」

「っ何ですか!？」

思わずガタンとパイプ椅子から立ち上がる。

ついにあの目の真実がわかるかもしれないのだ。

対する刑事は、落ち着けというように両手を宗太の前に出してひらひらとさせる。

宗太は大人しく腰を降ろした。

「まあ慌てず聞け。とりあえず、仏壇に供えた一万円札の中の福沢諭吉に変なものを感じる

という時点で、何かあると弟同様俺も思った。……こんな仕事してるからな。結構怪奇現象とかも耳にすることがあるわけさ。俺ら刑事でもわからない、非科学的な現象をな」

焼死した被害者と同じ手形が、犯人の胸からみみず腫れのように浮かび上がってきたとか。

飛び降り自殺した男の顔に似たシミみたいなものが、第一発見者の家の天井に出てきたとか。

「……」

神妙な顔つきで二人は、ぼんぼんと出された例に口を閉ざす。

「話が逸れたな。それで、俺はそんな話を見聞きしてたから真面目にその一万円札を見た。勿論何も変化は無い。だが、不審な点はある」

「不審な点？」

弟が聞き返す。

「血痕だよ」

物騒な単語に宗太は目を見開いた。

「わずかだが、その諭吉の左目の真ん中に赤い血がついていた。本当に顕微鏡で見ないとわからないくらいの大きさだ。気付かなくて当然だな。だから昨日科捜研にその血を提出し、調べてもらった」

「ごくりと二人がづばを飲み込む。」

「そしたらビンゴだった。去年銃で自殺したある地方の名士の血痕

とDNAが一致したよ」

拳銃自殺を図った、地元では有名だった男の血痕と一万円札についていた血が同じだというのだ。

「じゃあ、あの一万円札はその名士の……」

「そ、自殺した現場に何故か大量にばら撒かれていた万札の一枚つてわけだ。銃で頭を撃った時に血が少し付着したんだろう」

「なんでそんなお札が出回ってんだよ。普通警察が回収するだろ」

宗太も思っていたことを相沢弟が聞く。

「いや、それがな。……警察が通報を受けて駆けつけたときにはもう無かったんだ」

「なんだって!？」

「第一発見者だけが、死体の側に散らばった百枚くらいの札を見た。発見者は慌ててすぐに電話をしに現場を出て、そのまま怖くて警察が来るまで外にいた。そして到着した刑事がドアを開けると」

「札だけ消えてたのか」

「そういうことだ。だから札は発見者が死体を見て倒錯したことに

よる幻覚だと、報告書には書いてあった」

その発見者の証言は幻覚ではなかったのだ。

兄弟のやり取りを聞いていた宗太は、整理のつかない頭で、唯一思いついたことをぽつりと言った。

「……なんで消えて、何で俺のところに来たんだろう」

「さあな。ただ、名士の自殺には不可解なところがあるらしいから、他殺の可能性もあるそうだ」

自殺するような追い詰められた様子は生前無かったと報告書にはある。

事業に成功し、私腹を肥やし、全てが上手くいっていた男のどこに、人生を終わらせる理由があるだろうか。

恨まれるようなことはあるかもしれないが。

「……兄貴がさっき言ったような”非科学的”な現実があるんだとしたらさ、」

宗太の部屋に訪れた時のような、考え込む仕草を見せた相沢弟が独自の考えを出す。

目目目目目

「その名士に可愛がられたお札達が現場から飛んで、犯人探しにで

も乗り出したとか？それでもって同じく去年死んだ女性の仏壇に供えられて変な靈気が宿ってしまい、女性に強い感情を持つ息子にだけ目が動いて見えたとか？」

「まー否定は出来ないな」

「そんなこと……」

全くの想像じゃないか、と宗太は言おうとしたが。

「可能性はあるぞ。目が動いてるのは犯人を捜してるためかもしれないし。お前の動きを追ってるなら、お前が犯人であるかどうか確かめてたっつー考えも出来る」

いずれ、彼が犯人では無いとわかったらまたどこかへ飛んで行く予定もあったかもしれない。

そして違う人に出会って、ひょんなことから靈気が宿れば再び目が動く。

「……そんなお札が、まだ百枚くらいあるんですね」

「そうだな」

目目目目目

相沢兄は相槌を打って煙草をふかした。

次にふう、と白い煙を吐き出しながら天井を見上げる。

「もしかしたらどっかで動いてるかもな、諭吉の目。そろそろ盆だし、色んな霊気がお空に漂ってそうだし」

その後、鑑定も記録も済んで寺でお払いをしようと思つて保管室を覗くと、一万円札は消えていたという。

ぞろり

ぞろり

ぞろり

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4996c/>

目目目目目

2009年3月24日10時34分発行